

株式投資は、株主が「事業リスクを取る」ことで、他の人が働いてくれた成果を分配してもらえます。一方、融資や債券投資は、最初に決められた期限にお金が返済され、年2回程度、決められた金利が支払われる約束ですから、事業の成功も失敗も(倒産などを除けば)リターンにはあまり関係ありません。この特性の違いから、投資の中心に株式を据えた方が良いことを知っておきましょう。

## 株式は「儲かるほど・成長するほど分配が増える」という画期的な仕組み

株式は、債券と違い、金利の支払いの約束もなく、初めから元本を返済しない前提になっています。なぜ、こんなひどい(?)契約がまかり通るのでしょうか。株式は、株式を発行した会社(株式会社)が儲かれば儲かるほど株主への配当を増やす(事業が成功しなければ分配もしない)、という画期的な仕組みだからです。

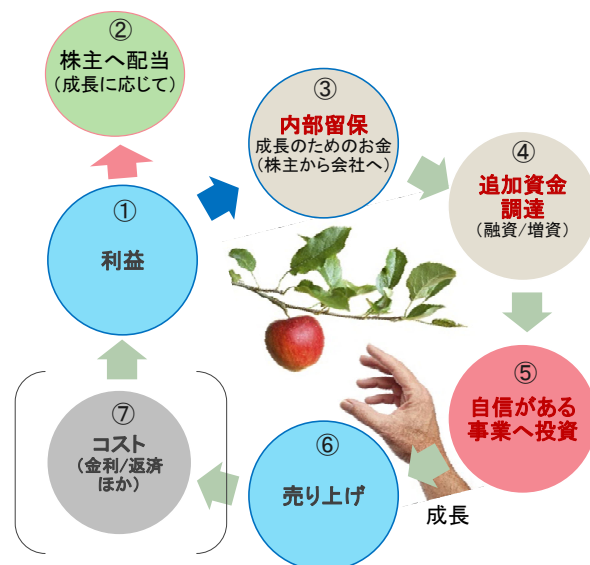
リスクが高い事業に投資するために、小口でたくさんの資金を集めることができ、経営者は目先の金利支払いにドキドキすることはありません。利益の一部を投資家に配当として分配しますが、成長機会があれば取り置いて次の投資に回すこともできます。経済を成長させるためにぴったりの仕組みです。投資家は、株価を動かすような事業のリスクを取る代わりに、自分が経営したり働かなくても、配当金や株価の値上がりによるリターンが期待できるのです。

## 株式には「値上がりする仕組み」がある

配当は分かりやすいとして、株式が値上がりする(少なくとも前もってそう期待できる)のはなぜでしょう? 実は、値上がりする仕組みがあるのです。株式会社は、利益の一部を株主に配当として支払い、残った部分(内部留保)を自信がある事業へ投資(設備を増やしたり人を雇ったり)します。つまり、株主にとって「将来の利益と配当への期待」が増えるのです。内部留保するからこそ、株価の値上がりが期待できる、ともいえそうです。それゆえ、議決権を行使して信頼できる経営者を選ぶことが大事になります。

一般的な事業サイクル(右図)では、利益①が出ると一部を配当②、残りを内部留保③します。次に③と追加資金④で、機械を買って生産ラインを増やしたり、倉庫を建てて在庫を増やしたり、人を増やして、自信がある事業⑤へ投資します。その結果、売り上げ⑥が増え、コスト⑦を支払った後の利益が、再び株主と将来の成長機会③に分配されるのです。

株主は、今の経営者の才覚で、将来の配当が増えることを期待し、目先の配当を減らしてでも内部留保することを認めるのです。ですから、会社が設備などに「投資する」と、投資家が株主になって「投資する」ことは、同じ「投資」になるのです。それ故、株式投資は、経営者の才覚によるリターンを得るチャンス、といえるのです。



※資本市場についての考え方の一例を示したものであり、イメージです。